

## 第42回国際造園家会議・国際会議（エジンバラ，2005年6月） について

親 泊 素 子

イフラ（IFLA）は国際造園家会議，英文では International Federation of Landscape Architects の略称で，1948年に創立された唯一の造園専門家て構成される国際組織である。ユネスコにも所属しており，各国一団体が窓口として認められており，日本ではジャパン・イフラが日本の窓口として（株）日本造園学会から平成7年に独立して設置され，同年にイフラの会員として認められている。

イフラは世界の造園デザインの研究とその発展を目的として，毎年テーマを決めて世界大会を開催し，お互いの研究，デザインの成果を発表するとともに，優秀な学生を育て，発掘するための学生コンペを実施し，また，開催された都市の優れた作品や過去の遺産等の視察も行っている。また，大会前には各国の代表者が集まりイフラ運営のための理事会も開催される。今回私は日本代表として，理事会と大会の両方に出席をしたので，理事会の印象もふまえて，この大会の感想を述べてみたい。

第42回IFLA世界大会は平成17年6月26日から29日までの4日間，スコットランドの古都エジンバラで開催された。大会の会場となったところはエジンバラの郊外 Heriot-Watt Riccarton 大学で，通常のホテルやコンベンションホールを使っの派手なものではなく，参加者も大学の寮に宿泊しながら，毎日分科会に顔を出すという雰囲気だった。夜も息抜きの遠出も出来ず，分科会の延長のような議論がキャプテリアで続けられ，朝から晩までアカデミックな雰囲気溢れる会議であった。

初日はエジンバラ芸術大学に展示されている「安全な都市と町」をテーマとする学生コンペの入賞作品をみたあとに，エジンバラ王立植物園で開会式が行われ，記念講演として「エジンバラ王立植物園のコンセプトについて」が話され，その後この植物園内で記念の植樹が行われた。やはりこういったところが造園家集団らしいと感じた。2日目と3日目は1)都市の盛衰，2)安全な都市，3)地方の盛衰，4)質と美と経済をテーマとして5つの分科会に分かれて発表が行われた。

全体を通して特に気になったことは，造園家が現代の環境問題にどのように参画していけるのかといったことであろう。かつては庭園や公園デザイン，都市計画といった線や面を対象とし，美を意識した造園計画やデザイン発表が主流であり，あくまでも，これらの担い手としての造園家プロ集団の技術論的なものが中心であったが，今回は生物多様性の保全を意識した在来種の利用だとか，温暖化を緩和できる屋上庭園，壁面緑化の手法，自然遺産，歴史遺産の復元手法，そしてこれらのプロジェクトにどのように住民やコミュニティの参加を促していくかといった発表や議論がめだったことである。もちろん，今回のテーマがこういったものを主題とするものだったということもあるが，年々，こういった傾向にむかっていることは誰もが認めていることである。すなわち，造園家もいままでの美の追求だけでなく，倫理的価値観が加わったデザイン手法が問われるようになってきたということであろう。

また，こういったプロジェクトには生態学，建築，土木，環境といった他の分野とも連携し

て行う必要があり、イフラ理事会でも WHC/ICOMOS, UNESCO, IUCN, ISoCARP といった専門家集団の組織との連携が議決事項に含まれていた。現に私はイフラ東アジア地区（アジアを中心とする）の環境政策委員会の仕事をまかされているが、この中でも、造園家がどのように環境問題に寄与できるかということがテーマであり、現在、そのためにアジアの主だった環境政策のとりまとめを行っている最中である。

しかし、一方では伝統的な造園技術にあこがれる造園家も多く、今回の世界大会ではヨーロッパの若き造園家たちが、一生に一度は日本の伝統的造園技術を学びに留学したいと憧れるような目で私に語った姿は忘れられない。現在、日本も世帯交代の時期にさしかかっており、もっと若い造園家が世界に羽ばたいてもいいと思うのだが、ジャパン・イフラにしてもこういった世界大会にしても日本の若き造園家の参加が少ないのはさびしい限りである。依然として語学の壁は厚いということであろうか？

あえて申せば、言葉による学会発表が難しくとも、イフラの世界大会の場合には作品の発表、展示も可能であり、自分の目を養うことのできるテクニカルツアーも用意されている。開催都市の公園、広場、庭園を実際に手がけたプランナーやデザイナーの解説は何にもまして素晴らしく、また、その思想から技術的苦労や裏話までしてくれ、そういったテクニカルツアーに参加するだけでも大きな成果を得ることが出来る。また、一般の人が入れないような文化財や自然遺産も見学する機会がイフラの世界大会の場合には多く、これは職業の特権ではないかと思うこともしばしばである。今回も6ヶ所のテクニカルツアーが用意され、私と高増泰子事務局長はスコットランドナショナルトラストが所有するフォークランド宮とケリー城の庭園の見学に参加した。霧雨けぶる中での城と庭園の美しさは伝統的なイギリス庭園の粋を集めるものであり、また、その解説もわれわれ造園家の造詣を深めるものであった。やはりこういった解説も一般の見学者として訪れたときには聞くことの出来ない専門家向けのものである。

また、見学に参加する道中でいろいろな国の参加者と親しくなるチャンスも多く、国際交流の場としても非常に価値のあるツアーであった。平成18年度はアメリカのミネアポリスでやや遠いが、平成19年の世界大会はマレーシアが開催予定なので、できればこういった分野に関心のある学生にもぜひ参加を呼びかけてみたいと思う。

最後にこの大会でもうひとつ印象に残ったのは、理事会や大会会場での案内のポスターやちらしが極端に少なかったことである。通常の国際会議や世界大会というと、大きな垂れ幕やブースの案内はもちろんのこと、参加者へのバッジや分科会プログラムといった案内が会場のあちらこちらで目に付くのであるが、この大会はそういったものもなく、むしろ参加者が迷子になるくらい極端に少なかったのである。その理由がイギリスとスコットランドの対立という苦い歴史的な関係からくるイギリス造園学会とスコットランド造園学会の関係プレイの不備からそうなったのか、エジンバラが世界遺産地域としての指定がなされているために、広告規制が厳しく、こういった風土がスコットランド学会関係者に当然の意識としてこの大会の形式にあらわれたのか定かではない。しかし、その前年の台湾での世界大会がことの外、華美だったためにこのコントラストがより強く印象に残った。さらに、理事会開催時はエジンバラ市内の大会指定のホテルに滞在したが、築200年以上たっており、しかもこのホテルはニュータウンにあった。古都エジンバラのオールドタウンには築500年、600年というホテルもあり、エジンバラの世界遺産としての価値を改めて認識させてもらった次第である。古いものを守るがゆえに、不便で非効率な場面にもでくわしたが、古都エジンバラは利便性や効率に勝る暖かい人のぬくもりと交流の場を感じさせてくれるところであり、これこそが、造園家の演出すべきアメニティの空間ではないかと感じた。

「知は現場にある」という言葉があるが、まさに、イフラの世界大会はこの言葉を毎回思い起こさせてくれる学会である。